噴火により埋没した鳥居，門柱

【所　在　地】鹿児島市黒神町 262，204
【種　　別】県指定天然記念物
【指定年月日】昭和 33 年４月 28 日

大正３（1914）年１月の桜島火山大噴火は，大量の軽石・火山灰を放出し，大隅半島側に厚く積もったが，とくに桜島の東側にあたる黒神町には厚さ約５ m 降り積もった。このため地元住民は軽石大地上に新たに集落を建設したが, 当時の東桜島村長野添八百蔵は, 埋没した黒神神社の鳥居と長野氏の門柱だけは，噴火の記念物として後世に残すことにした。鳥居と門柱は継ぎ目のない斜長流紋岩の岩柱でつくられている。

鳥居および門柱埋没の状況は，桜島火山の大正噴火の猛威を如実に実証している。

〈参考〉

桜島火山は，世界有数の活動的な複成火山として知られている。約２万５千年前，姶良カルデラの南縁に生まれ，その後，繰り返し噴火して次第に成長していった。確実な最古の噴火記録は天平宝字８（764）年で，噴火によって長崎鼻方向に溶岩が流れ，噴出した軽石が積み重なって鍋山ができた。この噴火で三島が誕生したが後に失われて，現在は見ることができない。

その後の大噴火は，文明３～８（1471 ～ 76）年，安永８（1779）年，大正３（1914）年，昭和 21（1946）年にあり，溶岩を流出した。安永の噴火では海底火山活動があり，新島（燃島）などの安永諸島が誕生している。これらの噴火に伴う溶岩は，それぞれ文明溶岩，安永溶岩，大正溶岩，昭和溶岩と呼ばれている。

桜島は昭和 30（1955）年 10 月に噴火活動を再開し，それ以降今日まで 50 年近くにわたり火山灰・火山砂・火山礫を放出し，時には巨大岩塊を噴きとばすなど活発な活動を続けている。